

学系の学生諸氏に特におすすめしたい。4つの独立した論文から成る論文集の形をとり、第1編「現代の物理学」、第2編「宇宙の構造と進化」、第3編「宇宙線の天体物理学」、第4編「パルサーの年」である。

第1編は、全体のイントロダクションをなし、現代の天文学の成果と発展、特徴、そして将来の問題をまとめている。第2編は宇宙論の問題の解説だが、わけのわからない宇宙論の解説書で頭がこんがらがっている人には、誠にスッキリとした物理的解釈を与えてくれる。定常宇宙論を、ひかえめにだがキッパリとやっつけていて、私は溜飲を下げた。第3編は、著者が指導的役割を果たしている宇宙線物理学についての解説で、宇宙線の起源を問いつめるのがこの編の主題である。ギンズブルグは、この分野では指導的役割を果たしているが、この編が一番わかりにくいのではないかと思う。私の理解力の足りなさのゆえかもしれないが、天文学特有の数字の乱発は、一般読者にとって苦痛であるにちがいない。最後の「パルサーの年」は、新天体、パルサーの解説で、1969年初めに書かれたものである。その後の新事実を補うため、2回にわたる補遺がつけられている。これを読むと、著者自身のパルサーに対する考えと認識が、新事実があらわれるにつれて変わっていく。これをとおして、

現代の天文学が、パルサーという全く新しい現象を、どのようにしてうけいれていったかが、よくわかるだろう。

ソ連の天文学は(他の分野は知らないが)、欧米のそれとずいぶんちがったものらしい。極わめて大規模で野心的でもあり、一方流行には全く無関心のようなでもある。巨大な、すぐれた装置を作るかと思うと、それのできる最先端の仕事には眼もくれず、悠々と大して重要でもないように(我々には)見える仕事にとりこんでいたりする。外からみてもわかるのは、国内の研究者の連絡の悪さである。同じような仕事をしている者同志が、互いの進行状況をあまりよく知らない。ギンズブルグは、本書第一編で、研究の組織化の必要を説いており(その中で国際間の競争にもふれている)、この点への関心も一般にないわけではないようである。業績におわれ、争って流行にとびつくアメリカの状態にくらべると、ソ連の現状になつかしい感じさえおきるけれども、科学の有効な発展のためには、もう少しソ連の研究者に奮起してほしいと思うのは私ばかりではないだろう。6mの巨人望遠鏡を完成し、600mの電波望遠鏡を建設中の今、特にそれが望まれる。(海部宣男)

賛助会員名簿

旭光学工業株式会社	鈴木幸三郎	住友化学工業株式会社	大谷一雄
朝日新聞社科学部	梅田敏郎	誠文堂新光社	小川誠一郎
アジア航測株式会社	駒村雄三郎	ソニー株式会社	井深大
アストロ光学工業株式会社	滝沢磐	谷村株式会社新興製作所	谷村昌子
岩井計算センター	岩井英夫	地人書館	上条勇
岩波書店	岩波雄二郎	天文博物館	
宇宙開発事業団	島秀雄	五島プラネタリウム	五島昇
カールツァイス株式会社	波木泰雄	東京精密測器株式会社	池辺常刀
関西電力株式会社	芦原義重	東京電力株式会社	木川田一隆
関東電気工業株式会社	関井忠夫	東北電力株式会社	若林彊
九州電力株式会社	赤羽善治	ナルミ商会	村上俊男
啓文堂松本印刷	松本喬	日米商会	高野高之
恒星社厚生閣	志賀正路	日本光学工業株式会社	杉豊
甲南カメラ研究所	西村中子	丸善株式会社	司忠
五藤光学研究所	五藤齊三	三鷹光器株式会社	中村義一
金光教本部教庁	金光鑑太郎	三菱電機株式会社	
三省堂	亀井要	電子営業第二部	伊東祐義
島田理化学工業株式会社	実武夫	ミノルタカメラ株式会社	田嶋一雄
新電子工業株式会社	山本和一	八洲測量株式会社	西村正紀